

ダウンアンダーの国から③

大貫 映子

「外国で勉強する気ないの？」というパートナーの一言がきっかけでした。いま、パースの大学で、生涯スポーツについて勉強中です。

これまで豪州の水泳事情を二回にわたって紹介してきたが、そう言えばいつたい私がここで何をしているか書いていなかった。今回はちょっと私生活の紹介を。

パースまでの道のり

現在、私は西オーストラリア州の州都パースにあるエディス・カーワン大学のレジヤ科学科(社会系)グラデュエート・ディプロマコースに在学中。

この学科、健康・人間科学部のもとにあり、生涯スポーツ、レクリエーションサービスを提供する専門家を養成することをめざしている。グラデュエート・ディプロマコースというのは、日本の「学士入学」にあたる。すでに大学卒業資格(どの分野でも可)を持つ人を対象にした一年の専門コースだ。私の場合は言葉のハンディを考え、一年のコースを一年半かけて勉強する事にコース主任と相談して決めた。

こちらの大学(特にこのエディス・カーワン大学)は、社会人入学を積極的に受け入れており、履修のしかたは柔軟性にとんでいる。一学期に一科目ずつとって、何年もかけて修了しよう

という人や、少し勉強しては半年休みをとって、また翌年学校に戻って来るなどさまざまだ。

私は、今年二月に、英語の力が十分と思えないうちに、海外学生枠の試験に合格してしまい(やったことのある問題がでた)、喘ぎながらも今のところ生き延びている。今、後期の試験直前で、もし今回なんとかまたパスできれば、折り返し地点は見えて来る。

そもそも、「本気で外国で勉強する気ないの?」とわがパートナーが私にきいてきたのがきっかけだ。旅行代理店をやめ、長く出掛けるなら、今がちょうどいいということ、そんな誘いになったのかも知れない。息子もまだその時二歳。親の勝手に生活をかえても文句を言われない、いい時期との判断もあった。私はその前に五年程、障害者の水泳プログラムに関わり、一人一人の個性にアプローチ方法を合わせるという、指導者の創造力が問われる仕事を結構おもしろがっていた。でも、まだまだ一般にはリハビリテーション、セラピー(療法)などの医療的な視点を抜け出せないことが多かったり、福祉関係者が熱心なわりに、すべての人

がレクリエーション・スポーツをという視点にたったスポーツ分野からの動き、関わりが少ないのものがたりなかつた(でも増えつつあるのは確か)。

そこで、さらに九一年マイアミ(米国・フロリダ)で開かれた「Adapted Physical Activities」シンポジウム(日本では「障害者フィットネス」と紹介されている)に参加したのが刺激になって、やっぱりどこかで、本格的に勉強したいなあ、と思い始めていたのだ。はじめは、具体的にいろいろなプール、水を使ったプログラムを幅広く見てみたいと単純に思っていたのだが、自分の興味を突き詰めていくと、人間の基本的な行為として「遊ぶ」「楽しむ」ということを当然と考える背景に、なにがあるか考えてみたいというところにも行き着いた。

様々な立場にたって

水泳が盛ん、「福祉が充実している」といわれ、物価も安く、治安よく、夫の仕事関係でパース生活体験のある人がいたり：などと条件が重なり、行き先がここパースと決まったのが、九二年の暮れ。まずは高校以来サビついて

いる英語をやり直さなくては、と英語学校の学生ビザを申請。彼と息子はその家族と言う事で、同じ条件のビザがおりました。もともと、料理も生活全般のことも、私などよりはるかに手際よくまとめられるわがパートナーは当然。夫になりきってもいい覚悟でやってきた。

息子のダイスケは、デイケアと呼ばれる「保育園」へ毎日通い、夫はアルバイト(日本語家庭教師など)と家の仕事(庭がジャングルのような古い一軒家を借りている)。

今学期は「スペシャル・グループのためのレクリエーション」というとてもやりたかった授業もあって、おもしろかった。障害者、老人、原住民のポリジニの人たち、少数移民、そして女性など、社会参加の機会がまだまだ限られている人たちがいる現実について、レクリエーション活動の視点から考える。

日本から見ると、一般的に豪州の女性の社会参加はすんでいるように見えるが、やはりスポーツ関係者は「スポーツへの女性参加は特に遅れている」という意識が高い。